

〔一〕 次の1～4の漢字の総画数を算用数字で答えなさい。(8点)

1 飛
2 蒸
3 疑
4 酸

〔二〕 次の漢字の部首名をひらがなで答えなさい。(8点)

1 発
2 単
3 祝
4 落

〔三〕 次のア～コの熟語の中で、上の字と下の字の関係が同じになっているものを抜き出し、2つずつの組を4組作り、記号で答えなさい。(8点)

ア	未来	イ	落石	ウ	自他	エ	河川	オ	辞職
カ	入金	キ	私有	ク	森林	ケ	花束	コ	多少

〔四〕 次の1～5の——線部を、送りがなに注意して、漢字とひらがなで答えなさい。(10点)

- 1 なかなかきびしい先生だ。
- 2 あきないの道はむずかしい。
- 3 新たな事実をつげる。
- 4 君があやまる必要はない。
- 5 ねちがえて首をいためる。

〔五〕 次の文中の1～7の（ ）に入る適当なことばをあとから選び、記号で答えなさい。なおア～コの言葉は一回ずつしか使えません。(14点)

二〇一六年が幕を開けて一ヶ月。僕はほくこの年を楽しみにしていたのだ。(1) 、僕はこの年に中学生になるからで、(2) 新しい制服に身を包んで登校をすることがあこが憧れだったのだ。(3) 中学生になるまではあと三ヶ月も残っている。(4) 卒業式もまだ終わっていない。まずは小学校の勉強をしっかりと身につけていかなければならない。(5) まずは毎日勉強を欠かさないようにしよう。(6) 中学校に入ってから周りの友達に負けない力をつけていこう。(7) 、遊びも欠かすつもりはないけどね。

ア	では	イ	だから	ウ	そして	エ	たとえば	オ	つまり
カ	ただし	キ	しかも	ク	しかし	ケ	あるいは	コ	なぜなら

〔六〕 次の1～6の（ ）に、からだの部分を示す漢字を一字入れ、完成した慣用句の意味として適当なものをあとから選び、記号で答えなさい。(12点)

1 () が立つ	2 () がない	3 () が付く
4 () をきく	5 () が切れる	6 () を明かす

ア	ものの考え方がするどい	イ	身元や足取りがわかる	ウ	出し抜いてあつと言わせる
エ	とても好きである	オ	しゃくにさわる	カ	間に入りうまくいくように取り計らう

〔七〕 次の1～5の二字熟語はある法則を持って並んでいます。□にはその法則に従った二字熟語ができる漢字一字が入ります。この□に当てはまる漢字を答えなさい。なお□が二つあるものには共通の一字が入ります。(10点)

- 1 空白 ↓ 白紙 ↓ 紙□ ↓ □識 ↓ 識字
- 2 紅白 ↓ 空港 ↓ 運動 ↓ □海 ↓ 移動
- 3 格好 ↓ 光線 ↓ 先生 ↓ 正解 ↓ □合
- 4 英語 ↓ 育児 ↓ 組合 ↓ □室 ↓ 追放
- 5 愛情 ↓ 因果 ↓ □季 ↓ 衛生 ↓ 横暴

「八」 次の1～5の各グループには——線部の語の使い方が他と違うものが一つあります。その文を記号で答えなさい。
(10点)

1
ア 協力すると、解けるものだな。
イ 遊びにいけないよ、勉強しないと。
ウ 何があるかと、やってみせる。
エ 多くの友人たちと学んだ。

2
ア ダメと知りながらしてしまう。
イ 空腹にたえながら助けを待つ。
ウ テレビを観ながらマンガを読む。
エ 食べながらしゃべるな。

3
ア 彼の車は格好良い。
イ 失敗は君のせいではない。
ウ あの人の言うことはおかしい。
エ 最高の料理を準備しよう。

4
ア まもなく高速道路が完成するようだ。
イ 鍵は内側からは開かないようだ。
ウ 悪魔あくまのような男だよ、あいつは。
エ 足にケガをしているように見える。

5
ア なぜだかわからないが先生にほめられた。
イ 彼にどう思われるかが心配だ。
ウ おこられているのは僕の友人だ。
エ 先輩せんぱいの卒業は悲しく感じられる。

「九」 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。(70点)

僕個人の話を読みますが、今から振り返って考えてみると、学校に通っていた頃の僕にとってのいちばん大きな救いは、そこで何人かの親しい友人を作れたことと、たくさんの本を読んだことだったと思います。

本について言えば僕は、なにしろ実いろいろな種類の書物を、燃えさかる窯かまにスコップで放り込むみたいに、片端かたはしから貪むさほり読んでいきました。それらの書物を一冊一冊味わい、消化していくだけで日々忙いそがしく(消化しきれないことも多かったですが)、それ以外の物事について考えを巡めぐらせているような余裕もほとんどないような状態でした。僕にとってはそれが①であって良かったのかもしれないと思うこともあります。自分のまわりの状況を見回し、そこにある不自然さや矛盾むじゆん注1や欺瞞ぎまん注2について真剣アに考え、納得アいかないことを正面から追及ついきゆうしていったとしたら、あるいは袋小路ふくろこうじみたいなところに追い込まれ、きつい思いをしていたかもしれません。

それとともに、いろいろな種類の本を読み漁あさったことによって、視野がある程度ナチュラルに「相対化X」されていったことも、十代の僕にとって大きな意味合いを持っていたと思います。本の中に描えがかれた様々な感情をほとんど自分のものとして体験し、イマジネーション注3の中で時間や空間を自由に行き来し、様々な不思議な風景を目にし、様々な言葉を自分の体に通過させたことによって、僕の視点は多かれ少なかれ複合Y的になっていったということです。つまり、今自分が立っている地点から世界を眺めるといっただけではなく、少し離れたよその地点から、世界を眺めている自分自身の姿をも、それなりに客観Z的に眺めることができるようになったわけです。

ものごとを自分の視点からばかり眺めていると、どうしても世界がぐっぐつと煮詰にっまってきたり、身体がこわばり、フットワークが重くなり、うまく身動きがとれなくなってきました。でもいくつかの視点から自分の立ち位置を眺めることができるようになって

ると、言い換えれば自分という存在を何か別の体系に託せるようになる、世界はより立体性と柔軟性を才びてきます。これは人がこの世界を生きていく上で、とても大事な意味を持つ姿勢であるはずだと、僕は考えています。読書を通してそれを学びとれたことは、僕にとって大きな収穫でした。

もし本というものがなかったら、もしそれほどたくさんの本を読まなかったなら、僕の人生はおそらく今あるものよりもっと寒々しく、ぎすぎすしたものになっていたはずですよ。つまり僕にとっては読書という行為がそのまま大きなAであり、僕はそこで多くの大切なことを身をもつそれは僕のために建てられ、運営されているカスタムメイド注5のAであり、僕はそこで多くの大切なことを身をもつて学んでいきました。そこにはしちめんどくさいキソクもなく、数字による評価もなく、激しい順位争いもありませんでした。もちろんいじめみたいなものもありません。僕は大きな「制度」の中に含まれていながら、そういう別の自分自身の「制度」をうまく確保することができたわけです。

僕がイメージしている「個の回復スペース」というのはまさにそれに近いものです。何も読書だけに限りません。ゲンゴウの学校制度にうまく馴染めない子供たちであっても、教室の勉強にそれほどキョウミが持てない子供たちであっても、もしそのよくなカスタムメイドの「個の回復スペース」を手に入れることができたなら、そしてそこで自分に向いたもの、自分の背丈にあったものを見つけ、その可能性を自分のペースで伸ばしていくことができたなら、うまく自然に「制度の壁」を克服していいのではないかと思います。しかしそのためには、そのような心のあり方Ⅱ「個としての生き方」を理解し、評価する共同体の、あるいは家庭の後押しが必要になってきます。

うちの両親はどちらも国語の先生だったから（母親は結婚したときに仕事をやめました）、僕が本を読むことについては、終始ほとんど一言も文句を言いませんでした。僕の学業成績に対して少なからず不満は持っていますが、「本なんか読まないで試験勉強をしなさい」とは言われなかった。あるいは少しは言われたかもしれないけど、記憶には残っていません。まあその程度

にしか言われなかったのでしょうか。それはやはり僕が両親に対して、感謝しなくてはならないことのひとつであるように思います。

もう一度繰り返しますが、僕は学校という「B」があまり好きになれませんでした。何人かの優れた教師に巡り合うことができて、いくつかの大事なことは学べましたが、それを相殺^{そうさい}して余りあるくらい、ほとんどの授業やコウギは退屈^{たいくつ}でした。学校生活を終えた時点で、「人生でもうこれ以上の退屈さは必要ないんじゃないか」と思えるくらい退屈でした。でもまあ、いくらそう思ったところで、僕らの人生において、退屈さは次から次へと、容赦^{ようしゃ}なく注^マ7 空から舞い降り、地から湧いて出てくるわけですが。

でも、まあ、学校が好きではしかなかった、学校に行けなくなってとても淋^{さび}しいというような人は、あまり小説家にならないのかもしれませんが。というのは、小説家というのは、頭の中で自分だけの世界をどんどんこしらえていく人間だからです。僕なんかも授業中は、授業なんかろくに聞かないで、ありとあらゆる空想に耽^{ふけ}っていたような気がします。もし僕が今現在子供だったら、学校にうまくドウ力^クできず、登校拒否^{きよひ}児童^{じしょう}になっていたかもしれません。僕の少年時代には幸か不幸か、登校拒否みたいなことがまだトレンド^{注8}にはなっていないなかったので、「学校にいかない」なんていう選択^{せんたく}肢^しそのものがなかなか頭に浮かばなかったみたいです。

どんな時代にあっても、どんな世の中にあっても、想像力というものは大事な意味を持ちます。

想像力の対極にあるもののひとつが「効率」です。数万人に及ぶ福島の人々を故郷の地から追いたてたのも、元を正せばその「効率」です。「原子力発電は効率の良いエネルギーであり、故に善である」という発想が、その発想から結果的にでっちあげられた「安全神話」という虚構^{きよこう}注9が、このような悲劇的な状況を、回復のきかない惨事^{さんじ}注10を、この国にもたらしたのです。それはまさに我々の想像力の敗北であった、と言っているいかもありません。今からでも遅くはありません。我々はそのような「効率」と

いう、短絡たんらくした注¹¹危険な価値観に対抗できる、自由な思考と発想の軸じくを、個人の中に打ち立てなくてはなりません。そしてその軸を、共同体ココミュニティーへと伸ばしていかなくてはなりません。

とはいっても、僕が学校教育に望むのは、「子供たちの想像力を豊かにしよう」というようなことではありません。そこまでは望みません。子供たちの想像力を豊かにするのは、何といっても子供たち自身だからです。先生でもないし、教育設備でもありません。ましてや国や自治体の教育方針なんかではない。子供たちみんながみんな、豊かな想像力を持ち合わせているわけではありません。駆けっこの得意な子供がいて、一方で駆けっこのあまり得意ではない子供がいるのと同じことです。想像力の豊かな子供たちがいて、その一方で想像力のあまり豊かとは言えない——でもおそらく他の方面に優れた才能を発揮する——子供たちがいます。当然のことです。それが社会です。「子供たちの想像力を豊かにしよう」なんていうのがひとつの決まった「目標」になる④、それはそれでまたまた変なことになってしまっそうです。

僕が学校に望むのは、「想像力を持っていく子供たちの想像力をケ圧殺おさしてくれるな」という、ただそれだけです。それで十分です。ひとつひとつの個性に生き残れる場所を与えてもらいたい。そうすれば学校はもっとじゆうじつ充実じゆうじつした自由な場所になっていくはずですよ。そして同時に、それとコハイコウコして、社会そのものも、もっと充実した自由な場所になっていくはずですよ。

僕は一人の小説家としてそう考えます。まあ、僕が考えて、それでどうなるというものでもないのでしょうか。

(村上春樹『職業としての小説家』による)

【語注】

- 1 矛盾 …… 二つの事柄ことごとのつじつまがあわないこと。
- 2 欺瞞 …… 人の目をだまし、ごまかすこと。
- 3 イマジネーション …… 想像。
- 4 柔軟性 …… やわらかく、しなやかな性質。
- 5 カスタムメイド …… 特別注文で作った品。オーダーメイド。
- 6 相殺 …… 相反するものが互たがいに影えい響きし合あって、その効果などが差し引きされること。
- 7 容赦なく …… 手加減しないで。
- 8 トレンド …… 流行。
- 9 虚構 …… 実際にはない、作り上げたこと・もの。
- 10 惨事 …… むごたらしいできごと。いたましい事件。
- 11 短絡した …… 途とち中ゆうの筋すじ道みちを無視して、関係のない原因と結果あるいは前提と結論を結び付けること。

問1 〓〓線部ア〜コについて、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して、それぞれ答えなさい。

問2 〰〰〰線部X「相対化」・Y「複合的」・Z「客観的」の対義語を答えなさい。

問3

A

・

B

 に入るのに最もふさわしい言葉をそれぞれ文章中から抜き出し、漢字で答えなさい。

問4 〓線部①「それ」の指示内容を文章中の言葉を使って答えなさい。

問5 〓線部②「そのようなカスタムメイドの『個の回復スペース』を手に入れることができたなら」について、筆者にとってのカスタムメイドの「個の回復スペース」とは何ですか。文章中から三字以内で抜き出しなさい。

問6 〓線部③「それはまさに我々の想像力の敗北であった」について、次の各問いに答えなさい。

1 「我々の想像力」は何に敗北したのでしょうか。文章中から三字以内で抜き出しなさい。

2 「我々の想像力」が敗北しないために必要なものは何ですか。文章中から十字以内で抜き出しなさい。

3 「想像力の敗北」の例にあてはまる過去の出来事を自由に考えて答えなさい。なお、なぜその出来事があてはまるのかを説明しながら答えること。

問7 〓線部④「それはそれでまたまた変なことになってしまいそうです。」について、筆者がこのように述べる理由を、「想像力」「効率」「目標」「発想」という言葉を使って具体的に説明しなさい。

問8 筆者が考える学校について最もふさわしいものをア～オの中から記号で選びなさい。

ア 学校が充実した場所になるには、客観的に自分を眺められる姿勢を身につけられる「個の回復スペース」が必要である。それには学校の「制度」が必要な場合もあるが、多くの場合、自分で見つける必要がある。

イ 学校ではカスタムメイドの教育を行うべきであり、その「制度」は立体的で柔軟性を持ったシステムにするべきである。なぜなら、「個の回復スペース」はそのシステムの中で生み出されるものだからである。

ウ 学校では「個の回復スペース」を作りだすことはできないが、共同体Ⅱコミュニティや家庭の後押しがあればそれが可能になる。したがって学校はそれらと連携し、子供たちの想像力を豊かにし、個性が生き残れる場所を与えてもらいたい。

エ 学校でできることは子供たちの想像力を抑えることなく、共同体Ⅱコミュニティや家庭の後押しのもと、「個の回復スペース」を温かく見守ることだけである。そうすることで子供たちは「制度の壁」を乗り越えることができる。

オ 学校という「制度」は多くの場合、子供たちにとって退屈さを生み出してしまふ。したがって想像力を豊かにする教育を共同体Ⅱコミュニティの後押しで進めなければならない。それと同時に社会そのものも、もっと充実した自由な場所になるはずである。

問9 ……線部「それを学びとれたことは、僕にとって大きな収穫でした」について、次の各問いに答えなさい。

1 筆者はどのようにそれを学びとったのでしょうか。学びとった過程が詳細に述べられている一文の始めの五字と終わりの五字を抜き出しなさい。なお、句読点も字数に含みます。

2 なぜ「僕にとって大きな収穫だった」のでしょうか。指示語を明らかにした上で文章中の言葉を使い、筆者の考えを具体的に説明しなさい。

受験番号	氏名	採点
------	----	----

一	1	2	3	4
---	---	---	---	---

二	1	2	3	4
---	---	---	---	---

三	と	と
---	---	---

四	1	2	3	4	5
---	---	---	---	---	---

五	1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---	---

六	1	2	3	4	5	6
---	---	---	---	---	---	---

七	1	2	3	4	5
---	---	---	---	---	---

八	1	2	3	4	5
---	---	---	---	---	---

九											
問 1		ア		イ		ウ		エ		オ	
問 2		カ		キ		ク		ケ		コ	
問 3		ク		カ		キ		ク		コ	
問 4		ケ		カ		キ		ク		コ	
問 5		ク		カ		キ		ク		コ	
問 6		ケ		カ		キ		ク		コ	
問 7		ケ		カ		キ		ク		コ	
問 8		ケ		カ		キ		ク		コ	
問 9		ケ		カ		キ		ク		コ	

受験番号	氏名
------	----

受験番号	氏名	採点
------	----	----

1	9	2	13	3	14	4	14
---	---	---	----	---	----	---	----

1	はつがしら	2	つ・つかんむり	3	しめすくん(しめす)	4	くさかんむり(くさ)
---	-------	---	---------	---	------------	---	------------

三	イ と ケ	エ と ク	ウ と コ	オ と カ
---	-------	-------	-------	-------

四	1	2	3	4	5
	敵しい	商い	告げる	痛める	

五	1	2	3	4	5	6
	コ	オ	ク	キ	イ	カ

六	1	2	3	4	5	6
	腹	目	工	足	鼻	イ
	口	カ	ア	頭	ウ	

七	1	2	3	4	5
	面	雲	会	窓	雨

八	1	2	3	4	5
	エ	ア	ウ	ウ	エ

第 6 問のみ各 1 点
それ以外の問は各 2 点

受験番号	氏名

⑩	ア	な　と　く	イ	帯	ウ	規則	エ	現行
	オ	興味	カ	しゅうし	キ	講義	ク	同化
⑨	ケ	あ　こ　さ　つ	コ	並行	単一的	主観的	Z	
	⑥	A	学校	B				
⑤	③	③	1	効率	2	③	③	③
8	7	③	2	自由な思考と発想の軸	③	③	③	③
⑤	④	7	1	本の中に描くことです。	E	④	④	④
9	7	③	1	効率・利益を優先にした安全対策の不備が指摘されており、福島原発事故と同じような想像力の欠如によって、多くの犠牲がもたらされた。	③	③	③	③
8	④	7	1	自由な思考と発想ができなくなることで、福島原発事故と同じように想像力が制限され、結局は当初の目的が達成できないから。	E	④	④	④
7	④	7	1	自分が寒々しく、ぎすぎすしたものにならなかったため、(別解)自分という存在を何か別の体系に託す姿勢を学びとれたことは、複数の登場人物を考える、特に小説家である筆者にとって大変重要なことであつたから。	E	④	④	④